

学校づくりシンポジウムを開催

8月20日(木)に山ノ内中学校にて「学校づくりシンポジウム 学校と僕らのリアル ～山ノ内で育った若者と語るこれからの学校～」を開催しました。若者たちの経験や悩みを全体で共有し、これからの学校や教育について考える未来志向の前向きな時間となりました。

◆シンポジウム開催の趣旨◆

次代を担うこどもたちが、変化の激しい社会において「しなやかに、自分らしく生きる力」を育むためには、既存の学校の枠組みを超えた、多世代による対話と地域全体での学びの共有が不可欠です。その第一歩として、山ノ内町で育ち、現在は多様なフィールドで活動する若者たちの言葉を直接聞き、彼らの歩んできた「リアル(現実)」を共有することで、教育の原点である「こどもたちがどう生きたいのか」を考える機会とし、新しい学校づくりにいかす。

第1部 座談会

発表する5名の若者が小中学校時代を振り返りながら、当時の楽しみや疑問を語ります。また、新しい学校への期待や町への思いも伝えます。

第2部 小グループ懇談

スケッチブックを使って、若者たちが自分のこれまでの歩みを発表します。人生のターニングポイント、壁の乗り越え方など率直に語ります。

第3部 感想共有

シンポジウムで得たもの、これからも考えたいこと、今後の楽しみ、不安・・・互いにアウトプットし感想をシェアします。

第1部 座談会

山ノ内の学校と当時のぼくら



発表者 (左から)

山本 智也 さん
山崎 桜翠 さん
小林 朋樹 さん
宮崎 千優 さん
養田 笑奈 さん

高校生も参加!!

★座談会質問内容の一部★

- ① 小中学校の一番の思い出を教えてください。
- ② 小中学校でちょっと変だなと思っていたルールなどはありますか？
- ③ 「なんで」に最後まで付き合ってもらった経験はありますか？
- ④ 山ノ内町は好きですか？
- ⑤ 山ノ内町の新しい学校はどんな学校になってほしいと思いますか？

◆発表者の話◆

- ・小5・6でのアマランサス栽培と商品開発(おやき作りや長野駅での活動、町長への紹介など)が思い出に残っている。
- ・幼少期から母親が「なぜ学校に行くのか」などの問いや議論にずっと付き合ってくれたことが自分にはよかった。
- ・山ノ内町には都会の物質的充足とは異なる「自然や星空、精神的・感覚的なゆとり」が得られる魅力がある。
- ・こどもたちの「やりたいこと」に対し、大人がストッパーにならず伴走・応援してくれる学校を期待している。



第2部 小グループ懇談 悩みながら見つけた 自分だけの道



◆発表の様子から◆ 進路選択の場面での、何かを得るために何かを犠牲にする決断における悩み、友人関係を築くことへの悩み、コロナ禍による活動制限、何のために学校に行くのかなど、これまでの学校での経験を丁寧にふりかえり言語化する発表者の姿が見られた。また、自分が何を好きなのか、どういうものを好きとを感じるのかなど自己分析を丁寧にする発表者の姿もあった。今回の機会を得たことによって、自分のこれまでの歩みだけでなく自分自身がどんな人間なのかじっくり向き合うことができたという声があった。



第3部 感想交流

★参加者の感想より★

- ・ 若者たちのリアルな声を聴く中で、こどもの頃の「何で、そうなっているの?」という疑問に対して、大人が「制度で決まっているから」と答えてしまうことについて考えさせられました。自分自身も、教師として同じような返答をしていたことがあったと思い、反省しながら聴いていました。また、「やりたいことができる学校に」という若者の言葉から、こどもの声を聴くことの大切さを改めて感じました。こどもの「やってみたい」という気持ちに対して、できない理由を先に伝えるのではなく、どうしたらできるのかを一緒に考える大人でありたいと思いました。
- ・ 話を聞いた人のうちほとんどが受験やその後の友達などで悩んでいる人が多く、これから大学に向けて準備をするであろう自分にも通ずる話でした。とくに私は未だに進学したい大学を決めることができずに将来の不安ばかりが募る日々を過ごしていました。しかし悩みながらもなんだかんだ解決したり改善したりしているのを見て「意外ととんとかなるかもな」と思えるようになりました。これからも数えきれないほど失敗やミスがあると思いますがそれらを恐れずに進むことが大切だと気づくことができました。
- ・ 20歳前後の若者が、これまで自分が歩んできた道を客観的に考察し、さらにその先の自分自身の人生を見据えている姿に、驚きと共に頼もしさを感じた。彼らの前途に幸多かれと願わずにはいられない。一方で、学校に適應できないこどもたち、学校に息苦しさを感じているこどもたちも、実際問題としているわけで、私たちはこうしたこどもたちの存在を決して忘れてはならないと思う。そうならないための踏み込んだ取り組みが求められると思う。